

ふるさと黒島学のもつ可能性と課題

—佐世保市立黒島小中学校のふるさと教育に着目して—

深見 由利子

I. はじめに

山間部や農村漁村地域、離島といった地域では、立地条件により社会的に孤立しやすく医療や教育環境の充実が課題である場合が多い。これらを背景に若者らが都市部に流出することによる地域内での少子高齢化や過疎化が常に問題視されている。人口の流失は地域の生産業衰退や地域文化・伝統の後継者不足、生活環境の整備問題などを引き起こし、最悪の場合一つの地域の消滅につながりかねない。このような地域の現状を背景に文部科学省（1996）は、対策・改善策として地域のアイデンティティの確立や地域に対する愛着、誇りを育成することの重要性を提唱している。地域に対する愛着とは、「住んでいる地域が好きである」や「ふるさとには良いところがある」、「再びふるさとに戻りたい」など、人々が地域に対して感じる肯定的な感情と捉えることができる。つまり、教育を通して子どもたちに自分たちが住む地域への愛着を育むことが求められているのである。

1980年代以降、上記した現状を踏まえ各都道府県で地域に根ざした教育活動の実践及び地域の特色を組み込んだ学校づくりが目指され、展開されてきた。このような動きは総務省（2013）による各地で地域に根ざした生活・自然体験を通じた地域ぐるみの教育活動が見られるという報告からも明らかである。筆者は、このような動向を受け本稿では地域に対する愛着や誇りの醸成、及び地域に根ざした教育活動実践として、ふるさと教育に着目したい。本稿で用いる地域とは、主に児童生徒が生まれ育った地域すなわち、ふるさとを意味している。

ふるさと教育に関する先行研究は実践研究を対象としたものが多く見られる。中島（2015）による地域の教育資源を教師自らが発掘し教材化することを通じて教師の動機付けを促した研究や、Tanaka（2004）による地域に根ざした教育を教育課程に組み込むことと生徒の学習意欲の関係を明らかにしたものなどがある。松本ほか（2017）や白井（2015）は地域をフィールドワークとした生活体験や体験活動が、地域に対する愛

着の育成に有効であり定住志向の強化に影響を与えることを明らかにしている。また、山本・加納(2016)によって地域への愛着の形成過程には、人々や地域との関わりの密度が関係していることが指摘されている。これらの先行研究はふるさと教育の実践に関して示唆に富む。その一方で、「地域の特色を生かしたふるさと学習は、関心の強い教師が学年で実践しているものの、組織全体に浸透し定着するには至」(中島, 2015, p. 219) っていないという指摘も見られる。

ふるさと教育の中でも主に実践を対象とした先行研究では、地域資源の教材化や体験学習が教師、児童生徒の動機付けや意欲向上、地域に対する愛着の育成につながるということが明らかにされている。その一方で、これらの先行研究を通じて課題を二点あげることができる。一点目はふるさと教育に対する児童生徒や地域の人々の認識について言及がなされていない点である。そして二点目はいずれも学校を主体としたふるさと教育を取り上げているため、地域主体のふるさと教育や地域と学校の協働・連携という観点からの考察が十分ではない点である。

以上を踏まえ本稿では、児童生徒や教職員、地域の人々のふるさと黒島学に対する認識を中心に佐世保市立黒島小中学校におけるふるさと教育の現状を明らかにし、それが持つ可能性と課題を明らかにすることが研究目的である。

II. 研究課題と研究方法

はじめに、研究対象となる佐世保市立黒島小中学校（以下、黒島小中学校）の概要について簡潔に紹介する。黒島小中学校は2014年に小・中学校併設校として創始された後、2018年に長崎県で初めての義務教育学校として開校した。離島である黒島には高等学校がないため児童生徒は義務教育学校を卒業後、黒島を離れ佐世保市内や長崎市内に進学する。進学のために黒島を出た子どもたちが将来黒島に戻り就職、定住することは少なく、島内の人口減少や超高齢化に直結していることが地域の課題であると言える。

黒島小中学校では、義務教育学校である点を生かし、地域に根ざした特色ある学校づくりの一つとして新教科「ふるさと黒島学」が設立された。ふるさと黒島学は、ふるさと教育の充実及び地域とともにある学校を体現するために新設された教科である¹⁾。しかし2019年に新設されたため新規性があるという点や離島での実践という点から、ふるさと教育に関する教育活動やその可能性及び課題は検討に値する。よって本稿では、佐世保市立黒島小中学校で新設されたふるさと黒島学をふるさと教育として捉え、そこで展開される教育活動やその可能性及び課題について調査結果をもとに検討していく。上記した目的のもと、以下の研究課題と手順のもと研究を行う。

まず第Ⅲ章で黒島小中学校における、ふるさと黒島学のカリキュラムや学校経営の中での特色を明らかにする。学校要覧や教育計画といった資料をもとに学校経営の中

でのふるさと黒島学の位置付けや特色を整理する。

次に第Ⅳ章でふるさと黒島学及び黒島に対する、教職員や児童生徒、そして地域の人々の認識を明らかにする。ここではカリキュラム内の活動である、お魚祭りや黒島検定の2つに焦点を当てる。カリキュラム制作を担当する教職員や児童生徒、及び公民館長への聞き取り調査や黒島検定に向け実際に使用されている教材の分析を通して児童生徒や教職員、地域の人々の認識を検討していく。

そして最後に第Ⅴ章で、黒島小中学校で展開されるふるさと教育の可能性と課題について明らかにすることでこれを結論とする。

Ⅲ. ふるさと黒島学の特色

1. 学校要覧からみたふるさと黒島学

黒島小中学校では、「9年間を通して育てる ふるさとを愛し、未来を切り開く黒島っ子の育成」という学校教育目標が掲げられている。2019年度には、「夢の実現 15の春！～出口を意識した、9年間の学びの構築～〈義務教育学校の可能性（良さ）の探求〉」を重要テーマに設定し、これを体現するために10の目標が設定された。この中で最初にあげられているのが「義務教育学校の良さを最大限に生かす」である。具体的には①前期課程・後期過程の積極的な乗り入れ授業の実施、②多様な異学年交流による自己肯定感を高める、③地域の実情を踏まえた9年をひとまとまりにした取り組みの充実～検証と見直し～、④「中1ギャップの緩和（解消）である。具体策の中でも③については、特にふるさと教育に重点が置かれている。③に関して重点努力事項にも新教科「ふるさと黒島学の実証と検証」という記載があることや、2020年度に計画されている約13の校内研修にふるさと黒島学カリキュラム等に関するものが4つ含まれていることから、ふるさと教育に重点を置いている様子がうかがえる。

次に黒島小中学校が目指す子ども像、学校像及び教職員像である。まず子ども像では「自分（たち）なりの問いを立て、自分（たち）なりの仕方で、自分たち（なり）の答えにたどり着く」学びを通してふるさと黒島を愛する児童生徒を育てます」と記載してある。すなわち、ふるさと黒島学を通して問題の発見・解決能力を養いながら、主体的に児童生徒が黒島に関わることで地域への愛着を育成していくという姿勢を読み取る事ができる。また、目指す学校像が3つある中でも「地域とともにある学校」について、具体的に「島に一つしかない学校として、地域に根ざし信頼に応える学校」と説明がなされている。つまり、信頼関係を基盤として地域に開かれた学校が志向されているのである。一方、教職員像では「地域を愛する教職員像」として「地域に住み、地域の一員として、黒島の良さを知り、地域に貢献できる教職員」という目標が共有されている。このことから、黒島小中学校におけるふるさと教育（ふるさと黒島学）は離島にある学校という点を強みに、9年間を通して児童生徒の探究的な学びを促進しながら

ら、教職員も地域の一人として子どもたちとともに黒島の良さを学び、学校組織が一丸となり、地域に貢献していく姿が標榜されていると指摘できる。

2. 教育全体計画からみたふるさと黒島学

前項では学校要覧から、黒島小中学校は地域や教職員を巻き込み、学校全体、地域全体でのふるさと教育の実践が目指されていることが明らかとなった。では、学校教育の中で、ふるさと黒島学はどのように位置付けられているのだろうか。これを検討するために教育全体計画を参考に、主にふるさと黒島学の重点目標とふるさと黒島学において目指される児童生徒像を取りあげる。

ふるさと黒島学では「郷土黒島と自身の未来を切り開く児童生徒の育成」が重点目標とされており、具体的に次の3つが設定されている²⁾。①問題発見、解決能力の育成、②社会に参画する態度の育成、③他者との信頼関係とふるさとに対する愛着の育成、である。3つの目標の中でも、問題解決能力とコミュニケーション能力の育成は技能面に関する目標は社会へ参画する態度、すなわち社会市民的資質やふるさとに対する愛着の形成は価値・態度面の目標と大きく2つに分類することができる。つまり、黒島に対する肯定的な感情である愛着の形成を基盤に、黒島のためにできることを考えたりする思考力や人間関係を構築するためのコミュニケーション能力といった技能の伸張、そして追求すべき価値・態度として地域に参画していく児童生徒の主体性が目標の柱となっているのである。地域や地域の人々に繰り返し関わることによって、地域への肯定的な印象が形成されるという先行研究からも、人間関係の形成・維持に主眼を置くふるさと教育は、学校教育目標である、ふるさとを愛する子どもの育成に有効であると言える事ができる。

ふるさと黒島学で目指される児童生徒像では、具体的に次の4つが設定されている。①黒島の文化や歴史、環境と主体的に関わり、体験や活動を通して自分たちの地域を知り、地域を愛し進んでよくしようとする子ども、, 現在の自分を見つめ、将来の夢や職業について自ら考え行動しようとする子ども、③自分が経験したことや感じたことの中から課題を見つけ、目標を立て、進んで探究しようとする子ども、④自分の思いや考えを自分なりの言葉で表現し、友だち・家庭・地域の人々への情報発信などをして働きかけることができる子ども、である。すなわち、黒島の歴史や文化を中心に子どもが体験活動を通して、黒島の良さを発見・実感し、自身の将来について考えることのできる児童生徒像が描かれている。よって、ふるさと黒島学はキャリア教育及び進路指導という2つの目標をも内包しているのである。

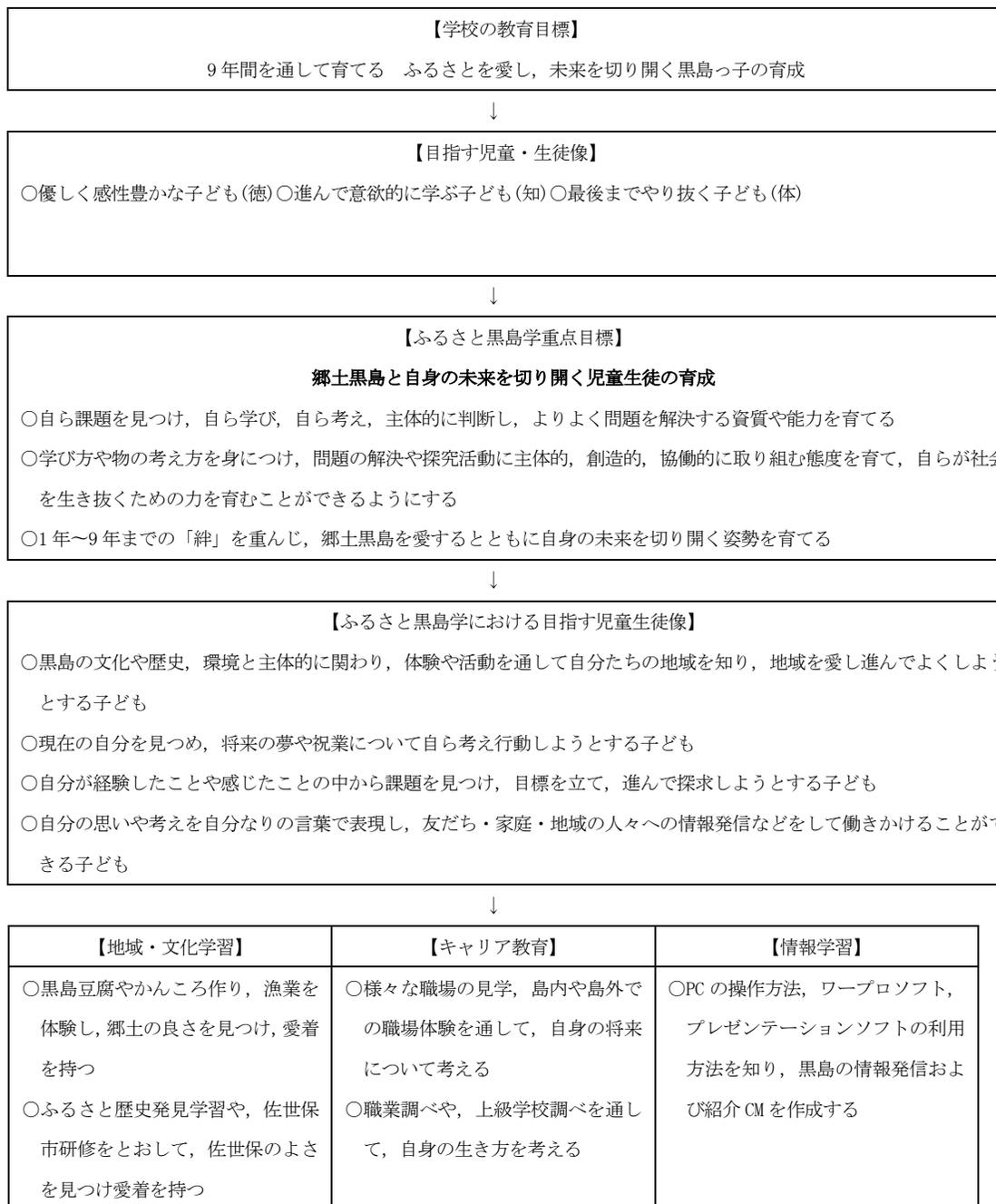


図1 黒島小中学校のふるさと教育全体計画

(佐世保市立黒島小中学校(2019a)より筆者作成)

3. カリキュラム構成からみたふるさと黒島学

では、実際の年間授業数やカリキュラムはどのように構成されているのだろうか。まず年間授業時間数についてである。以下の第1表が黒島小中学校における特別活動、総合的な学習の時間、ふるさと黒島学の年間授業数³⁾である。

年間授業数としてふるさと黒島学には上記の時間数が各学年に配置されている。黒島小中学校では、系統性を確保した教育課程の編成が可能であるという義務教育学校の利点を生かし、学習指導要領で定められている総合的な学習の時間の全てと特別活動の時間を各学年約10時間がふるさと黒島学に分配されている。また第1,2学年は学習指導要領に総合的な学習の時間が配置されていないため、生活科の時間数⁴⁾が58時間ずつふるさと黒島学に割り振られている。

次に年間カリキュラムについてである。ふるさと黒島学における年間カリキュラムは奇数・偶数年度の2つが計画されている。これは前期課程（初等教育）では1,2,3,4,5,6学年と2学年単位で共同実施が行われており、学習内容の重複を避けるためである。本稿では訪問時に奇数年度のカリキュラムが実施されていたため、主に奇数年度のものを取り扱う。

まず各学年におけるテーマとサブテーマ、その概要について以下に示した。概要の内容は、全体計画を参考にして教育活動の目標を示している。カリキュラムの枠組みから次のような流れが見えてくる。低学年では黒島での暮らしや仕事、歴史や文化について学び、中学年で黒島の魅力の発見やさらに深い知識を学び、獲得した情報の整理や発信を行い、高学年ではふるさと黒島学のまとめとして自身の将来について考えつつ、社会参画等を通して黒島への貢献を考えるという一貫性を持ったカリキュラムとなっている。中・高学年で行われる黒島観光マップ作りやCM制作など、児童生徒が得た知識や情報をアウトプットするという機会が授業の中に設けられていることから、児童生徒に学習に対する主体性や創造性が求められる学習構成であると評価することができる。

第1表 3教科の年間授業数

| 学年/教科 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 |
|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 特別活動 | 26(34) | 27(35) | 27(35) | 27(35) | 25(35) | 25(35) | 20(35) | 20(35) | 20(35) |
| 総合 | 0(0) | 0(70) | 0(70) | 0(70) | 0(70) | 0(70) | 0(50) | 0(70) | 0(70) |
| 黒島学 | 66 | 66 | 78 | 78 | 80 | 80 | 65 | 85 | 85 |

(佐世保市立黒島小中学校(2019b)より筆者作成)

第2表 ふるさと黒島学カリキュラムの枠組み

| 学年 | 段階 | テーマ (概要) | サブテーマ (奇/偶) |
|-----|--------------|--|-------------------|
| 1～2 | 低学年 (1～4) | ふれあおう黒島！！ ・黒島の自然，社会，人々の関わりを通して地域の良さを見つけ愛着を持つ ・黒島の人々の暮らしや仕事を知る | だいすき黒島， だいすき学校 |
| 3～4 | | | 黒島の人々の暮らし/ 福祉 |
| 5～6 | 中学年 (5～7) | 黒島の魅力を知ろう！！ ・黒島の文化や歴史を深く知り，魅力に気づく ・集めた情報を整理しまとめ，発信する ・様々な仕事を調べ，黒島の働く人々に興味を持ち，仕事を体験する | 黒島の魅力/ 長崎と平和 |
| 7 | | | 郷土を知る |
| 8 | 高学年 (8～9) | 黒島の未来，自分の未来を考えよう！！ ・黒島のためにできることを考え，地域や社会活動に参画する ・自分の将来のことを考える，島外で仕事を体験する | 郷土に学ぶ |
| 9 | | | 郷土に貢献する |

(佐世保市立黒島小中学校(2019a)より筆者作成)



写真1 生徒が制作したパンフレット
(2019年10月28日筆者撮影)



写真2 観光パンフレットの内容
(2019年10月28日筆者撮影)

前述したテーマや概要に基づき、カリキュラムが構成されているが、実際にどのような教育活動が行われているのだろうか。ふるさと黒島学で行われる授業は、地域・文化、福祉・健康、キャリア、情報、学校行事関連、その他の6つの分野から構成されている。その中で最も比重が大きいのが、地域・文化の項目である。これは教育内容が一番多く

設定してある点からも明らかである。その内容を見ていくと、体験活動が多く含まれており、特に海洋に関わる活動が多数見られる点が特徴的である。また全学年共通の教育内容としてお魚祭の実施や3～6学年での漁業体験、3～9学年でのシーカヤック体験など異学年間で共通したカリキュラムがあるという点、そして地域の人々も参加する教育活動が多いという点も注目に値する。カリキュラムには家庭や地域との連携が必要な教育活動が多く配置されていることから、ふるさと黒島学は児童生徒同士の交流はもちろんのこと、児童生徒や教職員、そして地域の人々といった人間の繋がりを意識した教育活動が行われていると言えよう。

これらのカリキュラムを実施するにあたって、となるのは地域や家庭との連携、協働である。黒島豆腐作りやカンコロ餅づくりといった地域の食文化に触れる体験や、黒島の人々との暮らしや生業⁵⁾と切り離すことのできない漁業体験など多くの教育活動は地域や共に暮らす人々の協力が必要である。地域と学校の連携、協働なしにはふるさと黒島学は実践できないのである。松本ほか(2017)のふるさと教育は学校教育と社会教育の連携によって成立する、という指摘からもそれは明白であろう。すなわちふるさと黒島学は、「児童生徒にとってふるさととなる黒島での生活と緊密な関係を構築しながら成立している教科」であることを前提として存在しているのである。ここでの黒島は人々や文化・歴史、学校といった黒島を構成する全てのものを指している。

第3表 「ふるさと黒島学」年間カリキュラム

| 学年/分野 | 1,2 | 3,4 | 5,6 | 7 | 8 | 9 |
|-------|---|---|---|--|--|--|
| 地域・文化 | <ul style="list-style-type: none"> 校外活動 大好き夏 お魚祭り さつまいも栽培、かんころ餅作り こども園交流 | <ul style="list-style-type: none"> 黒島の人々の暮らし(生活・文化・歴史) 漁業体験、お魚祭り シーカヤック体験 カンコロ餅 | <ul style="list-style-type: none"> 黒島の観光パンフレット 漁業体験、お魚祭り シーカヤック体験 カンコロ餅 | <ul style="list-style-type: none"> ふるさと歴史発見 お魚祭り 佐世保市研修 シーカヤック体験 黒島フォトコンテスト | <ul style="list-style-type: none"> お魚祭り 佐世保市研修 シーカヤック体験 黒島検定 | <ul style="list-style-type: none"> お魚祭り 佐世保市研修 シーカヤック体験 黒島検定 |
| 福祉・健康 | <ul style="list-style-type: none"> 昔遊び、高齢者交流 | <ul style="list-style-type: none"> アイマスク体験 | <ul style="list-style-type: none"> アイマスク体験 | <ul style="list-style-type: none"> 車いす体験、妊婦体験 | | |
| キャリア | <ul style="list-style-type: none"> 家での仕事、もうすぐ2・3年生 キャリア形成と自己実現 | <ul style="list-style-type: none"> 職場見学 キャリア形成と自己実現 | <ul style="list-style-type: none"> 職場見学 キャリア形成と自己実現 | <ul style="list-style-type: none"> 職場体験 職業調べ | <ul style="list-style-type: none"> 職場体験 上級学校調べ | <ul style="list-style-type: none"> 「15の春」に向けて 進学、就職学習 |
| 情報 | | <ul style="list-style-type: none"> パソコン | <ul style="list-style-type: none"> パソコン アルバム作成 | <ul style="list-style-type: none"> PCスキルアップ学習(word/excel/ppt) | <ul style="list-style-type: none"> PCスキルアップ学習(タイピング練習) | <ul style="list-style-type: none"> 黒島のCMを作ろう |
| 学校行事 | <ul style="list-style-type: none"> 佐世保市空襲資料館訪問 他校訪問 もちつき | <ul style="list-style-type: none"> 佐世保市空襲資料館訪問 他校訪問 もちつき | <ul style="list-style-type: none"> 宿泊体験学習 佐世保市空襲資料館訪問 他校訪問 もちつき | <ul style="list-style-type: none"> 他校訪問 絆学習 黒島科発表会 | <ul style="list-style-type: none"> 修学旅行 絆学習 黒島科発表会 他校訪問 | <ul style="list-style-type: none"> 修学旅行 絆学習 黒島科発表会 他校訪問 |
| その他 | | <ul style="list-style-type: none"> ガイダンス | <ul style="list-style-type: none"> ガイダンス | <ul style="list-style-type: none"> ガイダンス | <ul style="list-style-type: none"> ガイダンス | <ul style="list-style-type: none"> ガイダンス |

(佐世保市立黒島小中学校(2019a)より筆者作成)

人間がふるさどに対して持つ認識構造を明らかにした Ye(1995)は、ふるさとのイメージを構成する要素として自然的要素と人的要素という2つの要素が大きく影響していることを指摘する。Ye(1995)が説明する自然的要素とは森林や海、田畑といった地域の自然環境や家、学校、神社といった人工物を主に意味し、人的環境とは家族や友人など自身と人の関わりを指している。この指摘を参考にすると、ふるさと黒島学は、地域を構成する自然的要素及び人的要素の2つを教育資源として活用しており、これらを教材化することで地域に根付いたふるさと教育を実現していると言えることができる。つまり、ふるさと黒島学は離島にある地域唯一の学校であるという立地条件や豊かな自然条件そして、地域の人々や生活との密接な関係を強みに、黒島そのものを教育資源として活用しているのである。

IV. ふるさと黒島学に対する認識

1. お魚祭りを事例として

ふるさと黒島学では、全学年共通のカリキュラムとして「お魚祭り」が実施されている。お魚祭りは従来、毎年7月に子どもたちのために地域が主体となって開催されていた地域行事であったが、ふるさと黒島学の設立を契機に、児童生徒及び教職員の全員が授業の一環として参加するお祭りへと変化した。そのため、地域主体の行事を学校教育活動としてカリキュラムに組み込み込んだ事例と捉えられる。よって、地域主体のお祭りに学校がふるさと教育としての特性を見出し、教材化した特色ある教育活動と評価したい。では、どのような特性が見出されたのだろうか。第4表はお魚祭りへの参加団体と活動内容を示したものである。

お魚祭りには、黒島の漁業団体を始め、健全育成会といった諸地域団体が開催に大きく関わっている。これは従来、お魚祭りが地域主体の行事であり、現在も地域が主体となって運営していた流れを現在も受け継いでいるためである。しかし、ふるさと教育の一環としてお魚祭りがカリキュラムに取り入れられたため、お祭りの開催にあたって教職員は地域の人々と協働・連携する必要性が生じる。すなわち、地域と学校の信頼関係の形成や風通しの良さがカリキュラムの実施にあたって重要なポイントとなるのである。また活動内容では、体験活動を主とした稚魚の放流や釣り大会、マグロの解体実演などが活動の目玉となる。これらの活動は、海に囲まれている環境であるからこそ、そして漁業が盛んであるからこそ実施できるのである、黒島の生活環境を生かしている様子が見て取れる。

次にふるさと黒島学のカリキュラム制作を担当する教職員および児童生徒への聞き取り調査の一部を参考に、お魚祭りに対する認識を検討していく。第5表と第6表は聞き取り調査の内容をまとめたものである。

第4表 お魚祭りの詳細内容

| | |
|------|---|
| 参加団体 | 黒島小中学校教職員および児童生徒, 健全育成会, 青壮年会, 育友会, 漁業集落, 漁業協会, 漁業女性部, 水産センターなど |
| 活動内容 | 稚魚の放流, 釣り大会, マグロの解体実演, 魚捌き方教室, 海賊鍋の会食, ゴミ拾いなど |

(佐世保市立黒島小中学校(2019c)より筆者作成)

第5表 お魚祭りに対する教職員の認識

| | |
|------|--|
| 質問内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・黒島学のカリキュラム構成について考えることについて ・地域行事に参加するにあたってお魚祭りをどのように思うかについて |
| 教職員 | <ul style="list-style-type: none"> ・お魚祭りは地域のお祭りとしてあったものを, カリキュラムに取り入れることで黒島学の一部として構成した ・お魚祭りや漁業体験, かんころ餅作りなどは地域の人々と子どもが触れ合える機会となっている ・地域によって教育が支えられていると感じるようになった ・お魚祭りは「海」をキーワードに海からつながる学びをテーマとしている ・シーカヤックは学校で購入したものであり, シーカヤック体験は子どもたちが海と楽しく触れ合える機会となっている |

(聞き取り調査をもとに筆者作成)

第6表 お魚祭りに対する児童生徒の認識

| | |
|--------|---|
| 質問内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・ふるさと黒島学の中で一番印象深かった体験について ・なぜ一番印象深いと感じたかについて |
| 児童生徒 A | <ul style="list-style-type: none"> ・お魚祭りが一番楽しかった ・普段はみんなが集まって何かをすることが少ない ・たくさんの人が集まって一緒に何かをできる(する)ことが嬉しい |
| 児童生徒 B | <ul style="list-style-type: none"> ・地域の人と和気藹々と過ごせることが楽しい ・海を綺麗だと思うようになった ・お魚祭りで魚をさばけるようになった ・稚魚の放流をすると魚がどこかで釣られないか心配になる |

(聞き取り調査より筆者作成)

まず教職員への聞き取りからは, 地域行事をふるさと教育の題材として活用しているという明確な認識を汲み取ることができる。他教職員が「地域のお祭りに参加する

ことで地域の人々と交流し、黒島について知って、好きになってもらう」と述べていた点からも、積極的に地域の中に学校が参入していく姿勢がうかがえる。また、お魚祭りは地域の人々との触れ合いに重点を置いた体験活動であることが見て取れる。教職員が、祭りに参加することによって、教育が学校内だけで行われるものではないと気づき実感している点からも、お魚祭りが児童生徒だけでなく教職員も地域の人々と交流する機会を提供していることが明らかである。聞き取りを行った教職員は佐世保市内の中でも児童生徒の在籍数が非常に多い学校に勤務していた経験を有している。しかし黒島小中学校に赴任後、地域と教育のつながりを強く実感するようになったとも述べていた。これは、黒島小中学校での教育活動がいかに地域と密接しているかを示す発言として捉えることができるのではないだろうか。地域の人々の交流に関して、黒島小中学校で、教職員も校内研修等を通して黒島について学ぶという学校方針がとられている。教職員は年間を通じて校内研修や地域・学校行事の計画及び参加によって、黒島の人々と交流する機会が確保されているのである。つまり、ふるさと黒島学のカリキュラム構成や実践は学校と地域の交流を促進する働きをしており、教職員自身も地域とのつながりを肯定的に実感できる環境が醸成されているのである。これが学校と地域のつながりや信頼関係を構築し、さらには学校と地域の親密さを基盤とした黒島への愛着が教職員にも形成されていくとすることができる。また、お魚祭りには「海」という大きな学習テーマが設けられている。このことから、身近な生活環境であり黒島とは切り離せない海について、魚を切り口に学んで欲しいという狙いの存在が示唆されている。

次に児童生徒への聞き取りから大きく三点が確認できる。第一に子どもたちは地域の人々と集まり共に作業ができる機会であると肯定的に捉えていることである。地域の人々とのふれあい、すなわち人間関係の構築というふるさと黒島学においてお魚祭りが担う目標は達成されているとすることができる。第二に、魚を調理するという技術を習得する機会となっていることである。自分で魚を捌き、食べるということを通じて、食育の側面も果たしている。第三に、黒島の地域資源である海の美しさや海そのものに目を向けさせる可能性をお魚祭りは有していることである。お魚祭りは、海を学習テーマとしているが、児童生徒の聞き取りからは、海に対する思いが見受けられることから学習目標の達成を確認することができる。また海を美しいと感じることは、地域の自然環境に対する感動と評価でき、海を通して黒島に愛着を形成する一要因となりうると言えよう。

以上を踏まえると、お魚祭りに見出された特性として二点が挙げられる。第一に学校と地域が協働する機会となっていることである。地域の行事を学校の教育活動として活用することで、教職員が地域に参入し地域と共に計画を立て実践に移さなければならない。学校側は地域の人々のお祭りに対する願いや思いを尊重しつつ、教育活動とし

での目標や狙いを設定する必要があるのである。なお、お魚祭りに内包された目標とは地域交流やキャリア教育、食育といった要素であることが聞き取り調査から明らかとなった。このような過程の中で地域の人々との交流を重ね協働することで子どもに黒島の良さを伝えるという目標を共有することができるのである。第二に、お魚祭りを通じて児童生徒と教職員が地域社会に触れ、地域の人々と交流することができると同時に、海を身近に感じることができることである。聞き取り調査から児童生徒や教職員は、地域の行事に参加することや地域の人々との触れ合いによって黒島に対する愛着や肯定的な印象を形成していることが明らかとなった。つまり、お魚祭りは地域行事を教育資源として活用したものであり、海や魚といった自然的要素及び地域の人々といった人的要素が緊密に関わっている教育活動と評価できるのである。

2. 黒島学子ども検定を事例として

ふるさと黒島学では、黒島学子ども検定⁶⁾（以下、黒島検定）が第8,9学年で実施される。黒島検定はふるさと黒島学を通して黒島について学んだ知識や情報が身についているかを確認する、いわばテストの1種であり総まとめとである。生徒は黒島検定を受験するにあたり地域学習を行うがこれは、学校に講師として公民館長を招くことを通じて授業が展開される。本項では、黒島検定をキーワードに実際、授業で使用される教材や公民館長への聞き取り調査の分析をもとに、ふるさと黒島学に対する公民館長の認識を明らかにしたい。

まずふるさと黒島学における黒島学子ども検定の概略を説明する。黒島検定は2019年度にふるさと黒島学が教科として成立した時、学校からの発案によりカリキュラムの1つとして構成された。先述したように黒島検定の実施にあたり公民館長が学校に赴き講師として授業を行うが、5年前まではサマースクールの一環として公民館で公民館長が子どもたちに黒島の歴史や文化・自然などについて主体的に講座が開かれていた。現在では教職員も生徒同様に黒島検定を夏季休業中に受験できる体制が構築されているが、教職員の黒島検定についても生徒と同様に計4時間の講義⁷⁾があり、その内容には観光地を巡検することも含まれている。従来は公民館で行われていた学習、つまり地域で展開されていた地域学習が、現在ではふるさと黒島学の一部として学校で展開されている点が特徴的である。ここで注目したいのは、学習の場は学校に移ったものの、学校は講師として公民館長を招いているという点である。つまり、今まで地域内で行われていた社会教育が学校教育に移行する一方で、公民館長が講師を行うことにより地域と学校のつながりが見出されていると評価することができる。

次に黒島検定で使用される教材についてである。教材は黒島地区公民館長によって作成されており、黒島検定が学校で展開される以前、公民館によるサマースクールで使用されていたものと同じものが活用されている。では、教材にはどのような内容が選定されているのだろうか。

教材は37枚のスライドからなり、内容は大きく黒島の概要と黒島の地域資源の2つに分類できる。黒島の概要とは位置情報や人口、黒島という名称の由来といった基本情報である。黒島の地域資源では、黒島天主堂や役所跡、神社等の歴史的建築物や串ノ浜岩脈、根谷の大サザンカやアコウの木といった観光資源が中心に取りあげられている。いずれも黒島や集落の歴史を基盤として説明がなされており、その成り立ちや背景といった詳細が簡潔に記載されている。また全体の紙幅の半分以上が黒島天主堂についての内容であることが特徴的である。その内容は、建設者であるマルマン神父や天主堂内外の構造、ミサなど多岐に渡る上に、いずれも史実に沿って詳しく記載されている。すなわち、教材の中では黒島天主堂に最も重点が置かれているのである。そして潜伏キリシタンという用語が頻出することから、黒島の歴史の中で潜伏キリシタンという存在は重要であり、深く関係していることを伝えようとする姿勢が見受けられる。教材の重点が黒島天主堂に置かれているのは、2018年に黒島の集落が「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺跡」として世界遺産に登録されたことが関連していることは確かであろう。しかし、黒島天主堂を含め、教材の内容選定はどのような意図から行われているのだろうか。これを明らかにするために、教材の作成者であり生徒や教職員に授業を行う公民館長への聞き取り調査を参考にする。第7表は聞き取り調査の内容を筆者がまとめ要約したものである。



写真3 公民館長によって授業が行われる様子
(2019年10月28日筆者撮影)

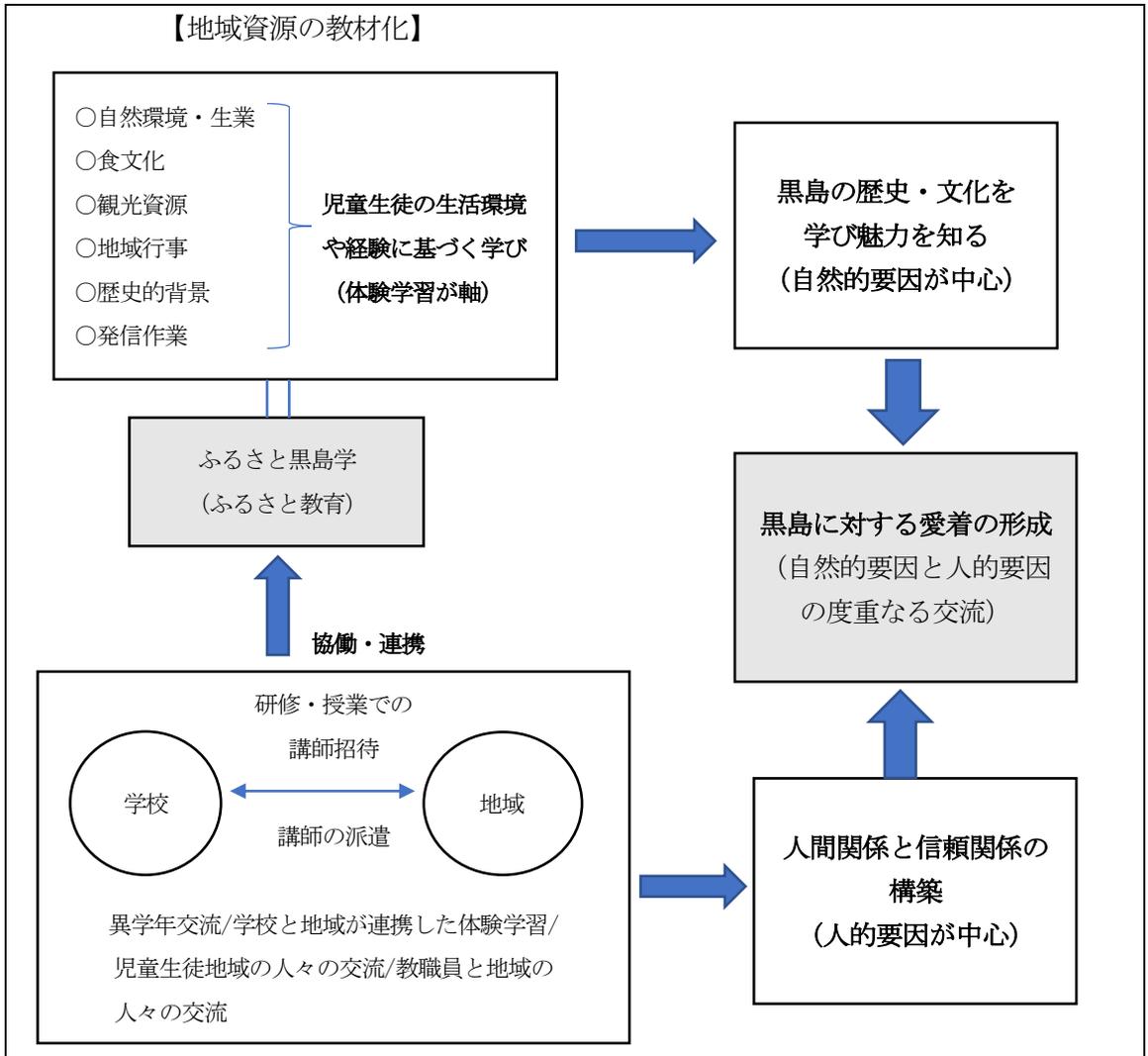
公民館長への聞き取りからは次のように解釈できる。まず教材の内容選定及び授業での意図や狙いについて、黒島に対する愛着と正しい知識の獲得を重要目標としていることである。その中でも児童生徒が地域の歴史や歴史観を正しく把握することに対する期待が大きく現れている。黒島には潜伏キリシタンと仏教徒が共存していたという歴史的背景があり、その歴史的価値が認められ黒島の集落は世界遺産に登録された。すなわち、黒島は潜伏キリシタンが共同体を維持しつつキリスト教が弾圧された社会のなかで、黒島の仏教徒とともに生活をした舞台であるという歴史を持っており、その証拠として黒島天主堂や国選定重要文化的景観に指定された黒島の集落景観が存在しているのだ。このような歴史的背景や歴史的建築物はまさに黒島にしかなく、他の地域との差異化が図れる素材である。よって、地域資源の中でも観光資源という側面から見れば、黒島の歴史や文化は固有性を持つふるさととして意識しやすい条件にあると言えるであろう。

第7表 ふるさと黒島学，黒島検定に対する公民館長の認識

| | |
|-------|---|
| 質問内容1 | カリキュラムにふるさと黒島学が設置されたことについて |
| 公民館長 | <ul style="list-style-type: none"> ・ふるさと教育を通して黒島で生まれてよかったと思ってほしい ・将来的には子どもたちが黒島に戻って来てくれると嬉しい ・授業では，黒島に対する知識を正しく伝えることが大切である ・数年前までは公民館でふるさと学を実施していた ・1998年に黒島天主堂が文化財に登録された後，黒島には観光客に対応するガイドの要請が行われるようになった ・(黒島の) 子どもたちにも(黒島) 子どもガイドとしての知識を持ってほしい |
| 質問内容2 | ふるさと黒島学で授業をするときに意識していることについて |
| 公民館長 | <ul style="list-style-type: none"> ・黒島に対する愛着と正しい歴史観を持ってもらうこと ・授業に対する好奇心やワクワク感 ・黒島の本質的な価値や黒島の見方 |

(聞き取り調査をもとに筆者作成)

次に，生徒の黒島に対する知識や歴史観の習得に合わせてそのアウトプットの場として観光客を見据えているということである。公民館長はNPO 法人黒島観光協会の理事長（2019 年度調査時）でもあり，1999 年から黒島観光ガイドの養成に携わってきた。観光協会が発足したのは2014 年であり，現在では約85 名のメンバーとともに，黒島の地域情報の発信や観光客の満足度の向上，歴史や文化の継承を目的に活動している。黒島検定で活用される教材は観光資源の比重が大きいことや，黒島や観光地の背景となる歴史や情報が各ページに記載されていることから，黒島検定は子どもガイドの認定試験の役割をも担っていると考えられる。つまり黒島検定は観光客のための観光ガイドの養成といった視点を内包しているのである。この観光ガイドの養成といった視点は，黒島そのものが持つ地域資源を観光資源として取り扱うことで，黒島の歴史や集落，自然環境や食文化といったものに新たな価値を付与する働きも担いうる。つまり，生徒や教職員は生活の一部であり自身を取り巻く環境を，観光という視点から客観的に学ぶことで黒島の歴史や文化の固有性や独自性，すなわち「黒島だけ」の歴史や文化を実感することによって，これらの経験をもとに黒島への愛着が育まれていくと言える。以上を踏まえると，黒島検定は黒島天主堂といった島の観光資源や潜伏キリシタンとの関係といった黒島の歴史を入り口に，島に対する知識の習得や魅力の発見を目指したものである。また黒島検定では，黒島の景観を構成する自然的要因を中心に学習構成がなされていることが明らかとなった。児童生徒や教職員の認識および，教材化される



第2図 ふるさと黒島学の構造
(筆者作成)

地域資源から、ふるさと黒島学は第2図のように捉えることができる。

ふるさと黒島学で重要となるのは次の二点である。第一に、ふるさと黒島学は、学校と地域のつながりが児童生徒や教職員、そして地域の人々との信頼関係を構築しているという点である。第二にふるさと黒島学は、児童生徒の生活環境や経験に基づく学びが基盤となっており、黒島の人々の暮らしや歴史・文化などの地域資源を教材化し体験学習を軸としてカリキュラムが構成されているという点である。そのため、学校の教育目標やふるさと黒島学の目標として掲げられる、黒島に対する愛着の育成は主に人間関係や信頼関係の構築という人的要因と、海や歴史的建築物などの地域資源である自

然的要因を通じて黒島の歴史・文化を学び魅力知るという行為から達成される。すなわち、ふるさと黒島学を通して自然的要因と人的要因への度重なる交流が児童生徒そして教職員たちの黒島に対する肯定的な印象や愛着を育んでいくのである。

V. ふるさと黒島学の可能性と課題

1. ふるさと黒島学の可能性

黒島小中学校でのふるさと黒島学の位置付けや、児童生徒、教職員、公民館長の認識をという内容を踏まえ、ふるさと黒島学の可能性と課題について整理したい。まず可能性について二点指摘する。

第一に黒島天主堂が黒島の象徴、つまり地域アイデンティティとなりうることである。ふるさと教育はふるさとに対する愛着や誇りを育成することが第一目標であるが、これを文科省（1996）は、地域アイデンティティ（の形成）、という言葉で表現している。本稿では地域アイデンティティという言葉の定義や概念を渡部・横張（2010, p. 644）の先行研究を参考に「生活や生業などの行為を通じて景観に働きかけを行うことによって形成され、地域で長年居住した者の集団が共有して認識する集団的アイデンティティ」と定義したい。また、景観を形成するにあたって不可欠であるその土地の気候や立地、植生といった自然環境と歴史や文化、経済、政治といった社会的環境も地域アイデンティティを形成するものとする。

黒島天主堂は世界遺産に登録された黒島の集落の目玉ともなる歴史的建築物である。言い換えると、世界遺産というブランドを持つのである。現在、黒島では天主堂を中心に観光業に尽力していることや、観光客の多くが天主堂を目的として訪問していることを考慮すると、黒島天主堂は観光としてのシンボルという側面を持つことは間違いないであろう。また児童生徒の大半が天主堂の位置を把握⁸⁾できていたことや、「黒島といえば天主堂」といった発言が見られたことから少なくとも、子どもたちには黒島天主堂の存在が非常に強く認識されていると言える。しかしこれについては観光としてのシンボルであるのか、または地域の象徴としてのシンボルであるのか検証を行っていないため、深く言及することは避けたい。さらに、天主堂はミサを行う場として日常生活に浸透している。つまり、歴史的建築物というだけではなく、現在でも地域の人々と生活においても緊密な関係を持つ空間なのである。黒島天主堂が黒島を構成する全てではないにせよ、島内外の人々に広く認知されていることを考えると、地域への愛着や誇りそして地域アイデンティティの形成に天主堂が果たす役割は大きいだろう。鈴木・藤井（2008a, p. 188）は「歴史と伝統と宗教性を湛えた風土との接触」によって始めて愛着が育まれる可能性」があると指摘している。よって、ふるさと教育の中で黒島の歴史や潜伏キリシタンと仏教徒との共存という伝統や宗教性を中心に黒島の歴史や天主堂などの授業での扱い方をさらに検討し深めていくことで、児童生徒の地域に

対する愛着は確実に育まれていくであろう。また黒島天主堂は地域ブランドの形成にも大きく影響を及ぼすものであり、島の観光業の活性化にも貢献する重要な要素となることは確かである。

第二に、地域全体を包括した学習機会の活性化である。岩佐（2013）は、ふるさと教育を、「地域づくり教育」とし、自然環境や地域に根ざした資源を活用し子どもが学校や住民を通して、住民は学校を通して地域を学ぶことで、学びの相互関係を形成するダイナミックな教育であると指摘する。つまり、地域資源を活用したふるさと教育を社会教育及び生涯教育と関連させ、学校と地域、子どもと地域の連携を強めることで地域づくりや社会参画を通じた社会貢献に発展させることが可能となるのである。ふるさと黒島学では、お魚祭りや漁業体験を始め、黒島豆腐やカンコロ餅作りなど、地域の人々と共に活動する体験型授業がカリキュラムに多く組み込まれている。聞き取り調査でも、学校教育を地域とともに盛り上げるという意識を持っている」や「ふるさと教育は、地域と一緒に学校が担うべき課題」であるという内容を聞くことができた。これらの現状を踏まえると、黒島小中学校におけるふるさと教育は、学校や子どもが積極的に地域に参加することを通じて地域の人々と関わることで、次のことが期待できる。まず児童生徒のみならず、地域の人々にとっても学びの場の提供につながることである。そして、地域と学校が連携し、児童生徒や地域の人々の交流が増えることにより、両者の学びに対する意欲の向上につながることである。

鈴木・藤井(2008b)は、地域に対する愛着が高い人ほど地域への活動に熱心であり、地域の協力行動への参加や行政を信頼する傾向が高いことを指摘する。黒島小中学校のふるさと黒島学では、愛着の形成を基盤に地域に貢献することや社会に参画することが目標として掲げられている(p. 4. 参照)が、児童生徒が黒島に愛着を持つことで、自主的に地域へ参画、協力していく態度や姿勢も育成できると言えよう。これは児童生徒に限定したことなく、教職員や地域の人々にも同様のことが言える。ふるさと黒島学の可能性として二点目にあげた学習機会の活性化は、ふるさと黒島学を手掛かりとして地域と学校が連携、協働していくことによって、児童生徒、教職員、そして地域の人々といった全ての人々が黒島に対する愛着を形成し、深めていくことにつながる可能性を有しているのである。

2. ふるさと黒島学の課題

その一方でふるさと黒島学の課題として次の二点を指摘することができる。

第一に、ふるさと黒島学における探究課題の設定の必要性である。ふるさと黒島学では「探究的な学び」や「学びへの主体的な姿勢」が目標として掲げられている。また黒島小中学校におけるふるさと教育は、9年間を通して重層的かつ深い学びが想定されたものである。これらを達成していくためには探究課題の設定や方向性の指針となるものが必要となるであろう。

例えば、聞き取り調査時、「黒島の本質的な価値」という発言がみられたが、この本質的な価値とは何なのか、またどのようにして価値を高め活用していくのか、といったように課題を設定することで、探究的な学びの展開が可能となるであろう。これらは学習内容を地域に還元することにもつながり、地域の将来を担う人材の育成という側面から重要な視点であると考えられる。この課題に対し、コウノトリを題材として実践されているふるさと教育を調査した本田（2019）による先行研究は示唆に富む。

第二に学校と地域の関係の継続方法の模索である。これは、教職員の異動に付随する課題である。島に着任した教職員は基本3年間勤務した後、島外へ異動する。教職員の異動に際して、カリキュラムや授業内容の引き継ぎはもちろんのこと、学校と地域の信頼関係の構築がその都度必要となってくる。ふるさと黒島学は地域と協働・連携した活動が多いため、学校と地域の相互の信頼関係を継続していく方法を模索し続けるがあるのではないだろうか。この課題に対して、校内研修や教職員の地域行事への参加は地域に触れるという点で有効であると考えられるため、学校経営の側面から検討していく必要があると言えよう。

VI. おわりに

本稿の研究目的は、佐世保市立黒島小中学校におけるふるさと教育の現状を明らかにし、それが持つ可能性とその課題を明示することであった。可能性として、地域アイデンティティの形成要素としての黒島天主堂と地域全体を包括した学習機会の活性化という二点を指摘した。また課題として、具体的な探究課題の設定の必要性と学校と地域の関係の継続方法の模索、の二点を指摘した。調査から黒島小中学校は黒島の豊かな資源を活用し、地域に根付いた特色あるふるさと教育を行っていると評価できよう。しかし地域との緊密な関係が保持できているのは、島唯一の学校であるという立地条件にある離島特有の性質が影響していると言えるだろう。これに加え、世界遺産である黒島の集落に存在する黒島天主堂という資源を有している点も、黒島の歴史や文化の固有性を意識させるふるさと教育を可能にしていると言えよう。

最後に、本稿で言及することはできなかったが、ふるさと黒島学が実施される中で黒島を知り魅力を実感し愛着を持つことで、将来、地域活性化の担い手の育成という視点から改めてふるさと教育を検討することが今後の課題となるであろう。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、調査にご協力頂いた佐世保市教育委員会の皆様をはじめ、佐世保市立黒島小中学校の校長先生、教職員の方々、児童生徒の皆さんそして、佐世保市黒島地区公民館長の山内一成様には大変お世話になりました。大変貴重なお時間を割いて頂きありがとうございます。地元での調査研究は大変意義深く、貴重な経

験となりました。これらの経験をこれからの研究にもつなげていきたいと思ひます。
心より御礼申し上げます。

注

- 1) 訪問当時の学校長の説明による
- 2) 重点目標を参考に筆者が要約したものを記載している
- 3) 特別活動の特活，総合的な学習の時間を総合，ふるさと黒島学を黒島学と表記し，
()内の数字は，学習指導要領で定められた時間数を示している。
- 4) 学習指導要領では，生活科の年間授業数に関して第1学年では102時間，第2学年では105時間を設定しているが，黒島小中学校では第1学年は44時間，第2学年は47時間が割り振られている
- 5) 長崎県は漁業が盛んであるが，離島である黒島も例外ではなく漁業は人々の生活や生業と密着している
- 6) カリキュラム上では黒島検定と表記されている
- 7) 研修という形で教職員は講義，検定を受講することとなっている
- 8) 白地図を用いて，黒島天主堂の位置を指で指してもらうことを通して検証したが，第3学年以上の児童生徒全員が正しく位置を把握できていた

文献

- 岩佐玲子(2013):地域其自然も社会に根ざした「地域づくり教育」を考へる. 環境教育, **23**(2), pp. 53-66.
- 鈴木春菜・藤井聡(2008a):「地域風土」への移動途上接触が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究. 土木学会論文集D, **64**(2), pp. 179-189.
- 鈴木春菜・藤井聡(2008b):地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究. 土木計画学研究論文集, **25**, pp. 357-362.
- 白井信雄(2015):「持続可能性チェックリスト」を用いた集落点検—山形県朝日町上郷区での施行. 地域イノベーション, **7**, pp. 3-10.
- 総務省(2013):地域活性化の拠点として学校を活用した地域づくり事例調査.
https://www.soumu.go.jp/main_content/000222444.pdf. (2020年7月24日最終確認)
- 中島美恵子(2015):地域の教育資源を生かした教材化，特色ある教育活動を目指して—ふるさと学習を通して—. 教材学研究, **26**, pp. 219-228.
- 本田裕子(2019):兵庫県豊岡市における「ふるさと教育」としてのコウノトリ学習の導入と検討. 環境教育, **28**(3), pp. 25-34.
- 松本京子・丘野公人・浦田慎・松原道男・加藤隆弘・鈴木信雄・早川和一(2017):地

- 域に根ざした学校教育活動が子どもの定住志向に与える影響に関する研究—石川県能登町における海洋教育の実例から—. 環境教育, **27**(1), pp. 16-22.
- 文部科学省(1996) : 第3章 これからの地域社会における教育の在り方. 21世紀を展望した我が国の教育の在り方について. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701j.htm. (2020年7月24日最終確認)
- 渡部陽介・横張真(2010) : 行為と距離の観点から見た農村地域居住者が地域アイデンティティと認識する景観の特性. ランドスケープ研究, **73**(5), pp. 643-646.
- 山本銀兵・加納誠司(2016) : 「地域への愛着」形成過程に関する考察—「町探検」の実践分析を通して—. 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要, **1**, pp. 17-25.
- Ye Kyung-Rock (1995) : 児童期の自然体験とふるさとイメージとの関連. 都市計画論文集, **30**, pp. 217-222.
- Takano Takako(2004) : *Bonding with the Land-Outdoor and environmental education programmes and their cultural contexts*. University of Edinburgh.
- 佐世保市立黒島小中学校(2019a) : 令和元年度教育計画
(2019b) : 令和元年度学校要覧
(2019c) : 令和元年度お魚祭り実施要綱